

中国



1 農・畜産業の概況

中国の国内総生産（GDP）に占める農林水産業の割合は、8.2%（2017年）であり、低下傾向で推移しているものの、世界のGDP上位10カ国の中でインドに次いで高い水準である。また、就業人口に占める1次産業従事者の割合は27.0%（2017年）と高い（表1）。

中国の農林水産業の総生産額は、増加傾向で推移しており、2017年は、前年比2.7%増の10兆9332億元となった（表2）。部門別の割合の推移を見ると、農業（耕種）は5割強まで減少した一方で、畜産業は3割弱にまで増加している。

表1 農林水産業の地位

（単位：億元、万人）

区分／年	1980	1990	2000	2015	2016	2017	前年比 (増減率)
GDP	4,588	18,873	100,280	689,052	743,586	827,122	11.2%
農林水産業	1,372	5,062	14,944	62,912	65,976	68,009	3.1%
割合(%)	29.9	26.8	14.9	9.1	8.9	8.2	▲0.7ポイント
就業人口	42,361	64,749	72,085	77,451	77,603	77,640	0.0%
第1次産業	29,122	38,914	22,790	21,919	21,496	20,944	-2.6%
割合(%)	68.7	60.1	31.6	28.3	27.7	27.0	▲0.7ポイント

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

表2 農林水産業総生産額の推移

（単位：億元）

区分／年	1980	1990	2000	2015	2016	2017	前年比 (増減率)
農林水産業	1,923	7,662	24,916	101,894	106,479	109,332	2.7%
農業(耕種)	1,454	4,954	13,874	54,205	55,660	58,060	4.3%
割合(%)	75.6	64.7	55.7	53.2	52.3	53.1	▲0.9ポイント
畜産業	354	1,967	7,393	28,649	30,461	29,361	▲3.6%
割合(%)	18.4	25.7	29.7	28.1	28.6	26.9	1.3ポイント
林業	81	330	937	4,358	4,636	4,981	7.4%
割合(%)	4.2	4.3	3.8	4.3	4.4	4.6	0.2ポイント
水産業	33	411	2,713	10,339	10,893	11,577	6.3%
割合(%)	1.7	5.4	10.9	10.1	10.2	10.6	0.4ポイント
その他	0	0	0	4,341	4,829	5,353	10.9%
割合(%)	0.0	0.0	0.0	4.3	4.5	4.9	0.4ポイント

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

注：総生産額は名目値

近年の畜産物の家庭での1人当たり年間消費量を見ると、家きん肉以外の畜産物は、都市部・農村部ともに消費量が増えている。ただし、豚肉を除くすべての品目で農村部の消費量が都市部の消費量を大きく下回っている（表3）。豚肉は、中国における伝統的な食材であるため、都市部と農村部の消費量にあまり差がないと考えられる。

表3 畜産物の家庭での1人当たり年間消費量

（単位：kg/人）

区分／年	2014	2015	2016	2017	前年比 (増減率)	
都市部	牛乳乳製品	18.1	17.1	16.5	16.5	0.0%
	牛肉	2.2	2.4	2.5	2.6	4.0%
	豚肉	20.8	20.7	20.4	20.6	1.0%
	家きん肉	9.1	9.4	10.2	9.7	▲4.9%
農村部	牛乳乳製品	6.4	6.3	6.6	6.9	4.5%
	牛肉	0.8	0.8	0.9	0.9	0.0%
	豚肉	19.2	19.5	18.7	19.5	4.3%
	家きん肉	6.7	7.1	7.9	7.9	0.0%

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

注：家庭での消費量であり、外食や加工品による消費は含まれない。

2 畜産の動向

(1) 養豚・豚肉産業

豚肉は伝統料理で多く使われる重要な食肉であり、中国の食肉生産量の約3分の2を占めている。米国農務省によると、2017年の中国の豚肉生産量と消費量は、それぞれ世界の約半分を占めており、ともに第2位のEUを大きく上回っている。

① 養豚の飼養動向

地域別に飼養頭数を見ると、山東省以南に多く、また、上位7省（自治区）で全体の5割以上を占めるなど、地域的に偏りが見られる（図1、2）。

農家の規模は、零細が極めて多く、年間出荷頭数が49頭以下の農場が全体の94.6%を占めている（表4）。

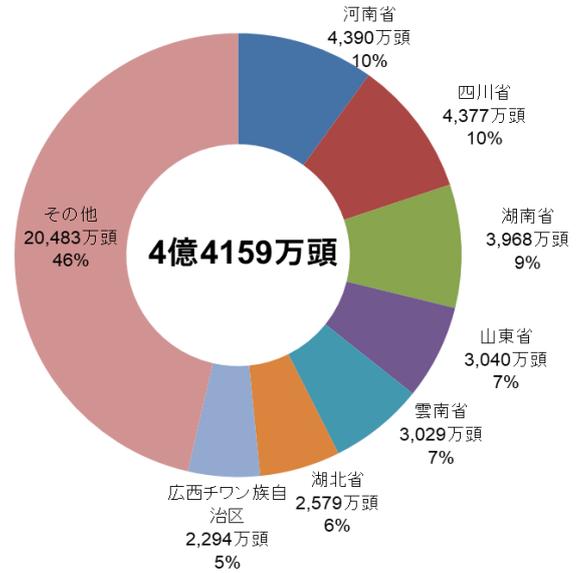
飼養頭数は2012年以降、減少傾向で推移しており、2017年には4億4159万頭とされている（図3）。

図1 地域別豚飼養頭数上位7省・自治区



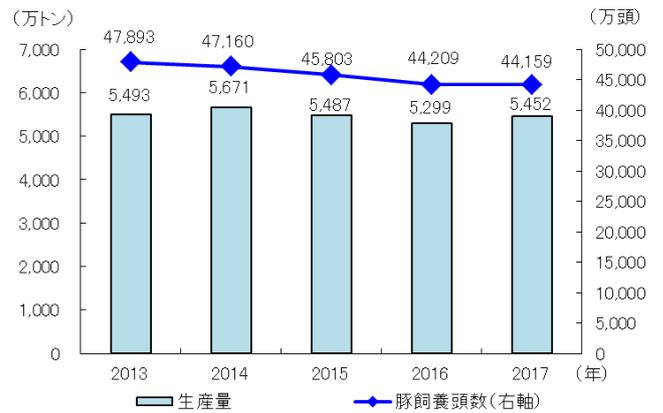
資料：中国農業農村部 「中国農業年鑑」

図2 地域別豚飼養頭数 (2017年)



資料：中国農業農村部 「中国農業年鑑」

図3 豚の飼養頭数と豚肉生産量の推移



資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

表4 豚の出荷規模別の農場戸数 (2017年)

(単位：万戸)

区分／規模	全体	1～49頭	50～99頭	100～499頭	500～999頭	1,000～2,999頭	3,000～4,999頭	5,000～9,999頭	10,000～49,999頭	50,000頭以上
戸数	3,775	3,572	121	60.3	13.3	5.8	1.21	0.69	0.41	0.04
割合	100.0%	94.6%	3.2%	1.6%	0.4%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

資料：中国農業部 「中国畜牧獸医年鑑」

② 豚肉の需給動向

豚肉の生産量は、2014年をピークに減少傾向で推移していたが、2017年は生産量、消費量ともに増加に転じた。環境規制による立ち退き（「④その他」参照）で多くの零細農家が養豚経営をやめたことで生産量が減少していたが、2017年は、大規模経営を中心に事業拡大が進んだためであると考えられる。

消費量は、人口増加や所得向上を背景に増加傾向で推移してきたが、2015年以降は減少している。これは、中国共産党の「中央八項規定」（いわゆる「儉約令」）が厳格に適用されたことで接待需要などが減少したことが影響したものと思われる（表5）。

2017年の輸入量は、国内生産量の増加により、過去最高を記録した2016年からは減少して162万トンとなった。

表5 豚肉需給の推移

（単位：万トン）

区分／年	2013	2014	2015	2016	2017
生産量	5,619	5,821	5,645	5,426	5,452
輸入量	77	76	103	218	162
輸出量	24	28	23	19	21
消費量	6,019	6,155	5,566	5,498	5,593

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」（生産量）、
USDA/FAS「PSD Online」（輸出入量）
注：枝肉重量ベース。



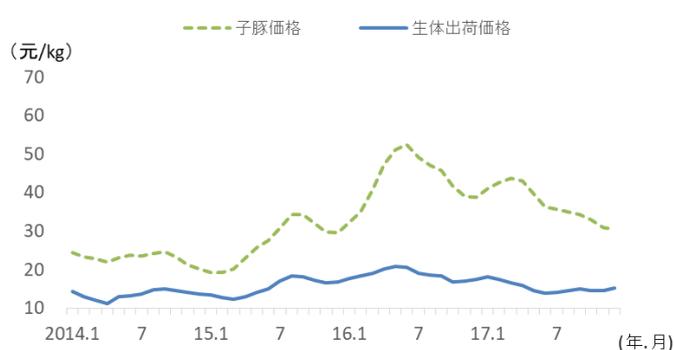
写真1 済南市内の市場での豚肉販売風景

③ 豚肉の価格動向

生体出荷価格は、多くの生産者が養豚から撤退したことによる生産量減少のため2016年に過去最高水準に達したが、2017年は、前述の通り大規模経営を中心に事業を拡大する動きが見られたことから、価格の下落が続いた。

子豚価格は、生体出荷価格と同様に価格の下落が続いている。子豚価格は生体出荷価格と比較して、価格の振幅が大きいことが特徴である。これは、膨大な数の零細農家が急激に飼養頭数を増減することが一因と言われている（図4）。

図4 子豚価格、生体出荷価格の推移



資料：子豚価格は中国農業農村部、生体豚出荷価格は中国国家発展改革委員会



写真2 北京市内のスーパーでの豚肉販売風景

④ その他

近年、「中華人民共和国環境保護法」などの法令によって、ばい煙や廃水を排出する工場などが厳しく取り締まられている。畜産農家も主に廃水を出すことを理由に取締り対象となっており、2014年1月に発効

した「大規模家畜家きん飼育場における汚染防止条例」によって、地方政府は、家畜・家きんの飼養を禁止する「飼養禁止区域」を設定することとされた。同区域内の畜産農家はすべて立ち退かなくてはならないが、現地専門家の話では、すべてが終わるまでに数年程度

かかると見られている。環境規制の詳細については、機構が発行する『畜産の情報』2018年4月号のP95を参照されたい。

また、2018年8月に中国で初めてアフリカ豚コレラの発生が確認され、その後、発生は全31省・自治区に拡大した。自身の農場でアフリカ豚コレラが発生した場合の被害を減らすために子豚の導入を控える生産者が多く、豚飼養頭数や豚肉供給量が大幅に減少した。このため、豚肉輸入量は増加し、牛肉や鶏肉などの畜産物への代替消費が進んでいる。現地専門家によると、この影響は数年続くと言われている。

(2) 酪農・乳業

中国の牛乳・乳製品の消費は、人口増大や所得向上、健康志向の高まりなどを背景に増加傾向にある。また、2008年に発覚したメラミン混入事件などにより、育児用粉乳を中心に消費者が輸入品を好むことが特徴的である。

国連食糧農業機関（FAO）のデータによると、2017年の中国の生乳生産量（水牛を除く）は世界第5位であり、全世界の4.7%を占める。

① 乳用牛および生乳の生産動向

地域別に飼養頭数を見ると、河南省以北で多く、上位6省・自治区で全体の7割の頭数を占めている（図5、6）。また、飼養規模別の農場戸数を見ると、飼養頭数49頭以下の農場が全体の98%を占めている（表6）。

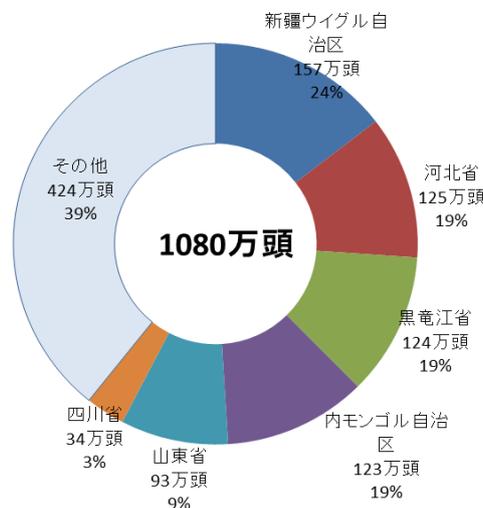
飼養頭数は2008年ごろまで急速に増加したが、それ以降は横ばいで推移し、2017年は、前年比4.1%増の1080万頭だった（図7）。

図5 乳牛飼養頭数上位6省・自治区



資料：中国農業農村部 「中国農業年鑑」

図6 省・自治区別乳用牛飼養割合（2017年）



資料：中国農業農村部 「中国農業年鑑」
注：2018年9月に修正される以前のもの。

表6 乳用牛の飼養規模別農場戸数（2017年）

区分／規模	1～49頭	50～99頭	100～199頭	200～499頭	500～999頭	1000～1999頭	2000～4999頭	5,000頭以上
戸数	832.5	9.1	3.3	2.6	1.6	0.8	0.4	0.1
割合	97.9%	1.1%	0.4%	0.3%	0.2%	0.1%	0.0%	0.0%

資料：中国農業農村部 「中国畜牧獣医年鑑」

図7 乳用牛飼養頭数と生乳生産量の推移



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」、中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

② 牛乳・乳製品の需給動向

生乳生産量は横ばいで推移していること、また、国内の乳業メーカー各社は、2008年に発覚したメラミン混入事件以降、特に育児用粉乳や高級ヨーグルトの製造には、国産原料を敬遠していることから、輸入量は増加傾向で推移している（表7）。今後も消費者の輸入ブランドへの信頼性の高さなどによって増加基調で推移すると考えられる。

表7 乳製品輸入量の推移 (単位: 万トン)

区分/年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
全粉乳	62	67	35	42	47
ホエイ	43	40	43	49	53
飲用乳	19	32	46	63	67
脱脂粉乳	24	25	20	18	25
育粉	12	12	18	23	30
クリーム	2.2	3.3	5.8	8.5	13.8
チーズ	4.7	6.6	7.6	9.7	10.8
バター	3.3	5.1	5.4	6.3	6.6
ヨーグルト	1.0	0.4	0.7	1.5	2.8

資料：USDA/FAS「PSD Online」、Global Trade Atlas

注1：全粉乳、脱脂粉乳、飲用乳はUSDAより。

注2：HSコードは、ホエイは040410、育粉は190110、クリームは040150、チーズは0406、バターは040510、ヨーグルトは040310。

乳製品のうち全粉乳（育児用粉乳、還元乳やヨーグルト、アイスクリーム、焼き菓子などの原料として使われる）の需給を見ると、2017年の消費量は、前年比6.2%減の187万トンとなった。また、2013年から2014年にかけての大量輸入で積み上がっていた在庫が解消していたため、2017年の輸入量は47万トンであった（表8）。主な輸入相手国はニュージーランドであり、同国はFTAによる関税削減の恩恵を受けて^(注)9割のシェアを占めている。

注：枠内税率は1.7%（2017年）。最恵国税率は10%。詳細は「畜産の情報」（2016年9月号）のP.95を参照。

表8 全粉乳需給の推移

(単位: 万トン)

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
生産量	120	135	162	138	135
輸入量	62	67	35	42	47
輸出量	0.3	0.6	0.4	0.3	0.2
消費量	175	185	191	199	187

資料：USDA/FAS「PSD Online」

脱脂粉乳は、全粉乳に比べて消費量が少なく近年は横ばいで推移している（表9）。また、国内生産よりも輸入量が多いことが特徴的である。

表9 脱脂粉乳需給の推移

(単位: 万トン)

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
生産量	5.4	4.9	4.5	4.0	3.0
輸入量	23.5	25.3	20.0	18.4	24.7
輸出量	0.0	0.2	0.1	0.1	0.1
消費量	28.9	30.0	24.4	22.3	27.6

資料：USDA/FAS「PSD Online」

中国では、飲用乳の消費量は、2015年をピークに減少しており、2017年は3253万トンであった（表10）。ロングライフ牛乳（以下「LL牛乳」という）が広く普及しているため、ドイツなど遠方の国からも輸入されている。

表10 飲用乳需給の推移

(単位: 万トン)

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
生産量	3,575	3,880	3,905	3,762	3,189
輸入量	19	32	46	63	67
輸出量	3	3	3	2	2
消費量	3,591	3,909	3,949	3,823	3,253

資料：USDA/FAS「PSD Online」

ユーロモニターインターナショナル社によると、小売販売数量は、フレーバーミルクが減少傾向であるのに対し、牛乳とヨーグルト、チーズは増加しており、特に、ヨーグルトとチーズは過去5年間で倍増している（表11）。

牛乳については、販売量の8割弱をLL牛乳が占めているが、要冷蔵の牛乳の割合が増加傾向にある。加えて、LL牛乳の中でも比較的賞味期限の短い製品の販売量が増えていると言われる。

フレーバーミルクについては、2014年以降急速に販売量が減少しており、消費者の健康志向が影響していると考えられている。

ヨーグルトは、急速に販売量が伸びている。中国では飲むタイプのヨーグルトが主流で、最近、特に常温保存できる商品が地方都市や農村部に急速に普及し、ヨー

グルト販売の拡大をけん引していると言われている。

チーズについては、プロセスチーズが8割強を占め、外食で提供されるピザやハンバーガーをきっかけに消費が広がっている。ナチュラルチーズの販売は少なく、さらに3割強をクセのないモzzarellaチーズが占めている。

表11 主な牛乳乳製品の小売販売数量の推移

(単位:万トン)

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
牛乳	889	937	959	984	980
うちLL	702	741	752	765	749
うち冷蔵	186	196	207	219	231
フレーバーミルク	856	900	798	688	615
ヨーグルト	484	568	661	685	856
チーズ	1.9	2.2	2.7	3.1	3.5

資料：ユーロモニターインターナショナル社

③ 生乳価格動向

生乳価格は、2013年夏の記録的な猛暑により生産が減少したため、同年後半から2014年初めにかけて上昇したが、その後下落し、2015年以降は安定して推移している(図8)。

図8 生乳の農場出荷価格の推移



資料：中国農業農村部

注：主要生産省・自治区（河北、山西、内モンゴル、遼寧、黒竜江、山東、河南、陝西、寧夏、新疆）における農場出荷価格の平均。これら10省・自治区で生乳生産の8割を占める。

④ 販売風景

要冷蔵の牛乳の陳列は日本と同様だが、LL牛乳は、写真3のように飲みきりサイズのものを10～20個程度（写真は190ml×15個入り）まとめて厚紙で包装し、豪華なプリントを施した製品が多く売られている点が特徴的である。同様の包装は、鶏卵でも一般的である。

また、フレッシュミルクや飲むヨーグルトは、写真4のようなビニールパウチに入った製品も多い。



写真3 LL牛乳



写真4 飲むヨーグルト

(3) 肉用牛・牛肉産業

① 飼養動向

中国で肉用牛の生産が始まったのは1990年代と言われており、それまでは牛は役畜として飼われていた。肉用牛として飼われているのは主に、黄牛（在来種）とシンメンタールの交雑種である。

地域別では、内陸部の飼養頭数が多く、上位7省・自治区で全体の5割強を占めるなど、偏在している点は他の家畜と同様である（図9、10）。農家は零細規模が極めて多く、年間出荷頭数が9頭以下の農場が全体の95%を占めている（表12）。

飼養頭数と牛肉生産量の推移を見ると、ともに増加傾向で推移しており、2017年の飼養頭数は6618万頭、牛肉生産量は635万トンとなった（図11）。米国農務省によると、2017年の中国の牛肉生産量は、米国、ブラジルに次ぐ世界第3位（米国の約6割）であり、全世界の生産量の1割を占めている。

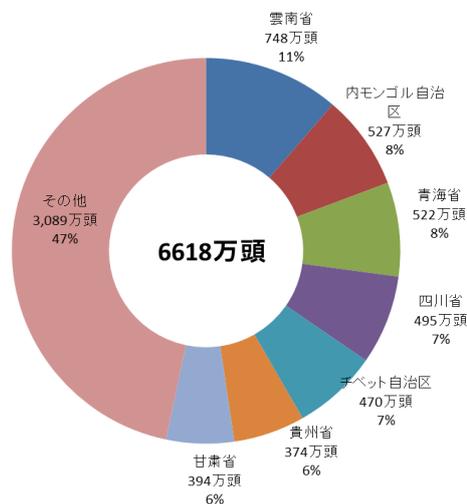
中国の牛肉消費は、イスラム教徒による消費が多いことから、ハラールの商品が多く売られている。

図9 肉用牛飼養頭数上位7省・自治区



資料：中国農業農村部 「中国農業年鑑」

図10 省・自治区別肉用牛飼養割合



資料：中国農業農村部 「中国農業年鑑」
注：2018年9月に修正される以前のもの。

表12 肉用牛の出荷規模別の農場戸数 (2017年)

(単位: 万戸)

区分/規模	全体	1~9頭	10~49頭	50~99頭	100~499頭	500~999頭	1,000頭以上
戸数	941.4	898.1	35.4	5.7	1.9	0.3	0.1
割合	100.0%	95.4%	3.8%	0.6%	0.2%	0.0%	0.0%

資料：中国農業農村部 「中国畜牧兽医年鑑」

図 1 1 肉用牛飼養頭数と牛肉生産量の推移



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」、中国農業農村部「中国畜牧兽医年鑑」
注：2013年～2016年の飼養頭数は中国国家统计局の統計値からALICで推計。

② 需給動向

牛肉消費量は長期にわたって増加し続けており、2017年は前年比5.0%増の730万トンだった(表13)。一方、国内生産は、2017年はわずかに増加したものの、需給ギャップを埋めるため、輸入量が急速に増えている。主な輸入相手国は豪州(3割強)、ウルグアイ(3割弱)である。

なお、現地専門家の中には、相当量の非正規輸入品が流通しているとの見方があるが、詳細は不明である。

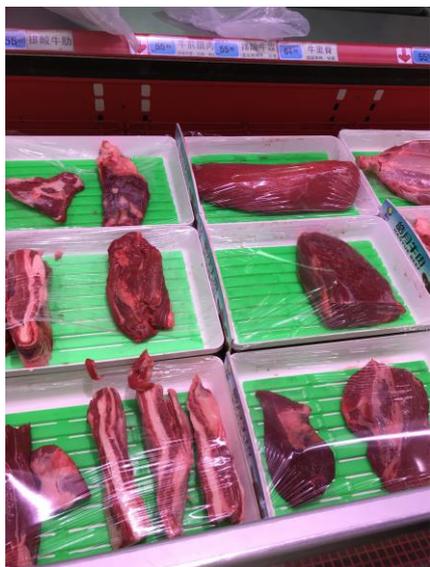


写真5 北京市内のスーパーでの冷蔵牛肉販売風景

表 1 3 牛肉需給の推移

(単位:万トン)

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
生産量	613	616	617	617	635
輸入量	41	42	66	81	97
輸出量	3	3	2	2	2
消費量	651	654	681	696	730

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」(生産量)、
USDA/FAS「PSD Online」(輸出入量)
注：枝肉重量ベース。

③ 価格動向

牛肉の卸売価格は、需要の拡大に伴って2014年に高水準となったが、2015年以降は輸入量の増加に伴って下降基調で推移している。(図12)。

図 1 2 牛肉卸売価格の推移



資料：商務部
注：2015年のデータは公表されていない



写真6 北京市内のスーパーでの冷凍牛肉販売風景。「清真」(ハラル)マークがついている商品も多い。

（４）肉用鶏・鶏肉産業

① 飼養動向

鶏肉は豚肉に次いで多く消費される食肉である。肉用鶏の品種は、約半数が海外品種（白羽肉鶏と呼ばれる）で、残りは在来品種（黄羽肉鶏と呼ばれる）や在来品種と海外品種の交雑種である。

地域別に飼養羽数を見ると、沿岸部で比較的多く、上位7省で全体の6割弱を占めている（図13、14）。1戸当たりの規模は、年間出荷羽数が2000羽に満たない経営が98.5%とかなりの割合を占めている。（表14）。

家きんの飼養羽数は、国内での鳥インフルエンザ発生により2013年に一時的に減少したものの、その後は増加基調で推移している（図15）。

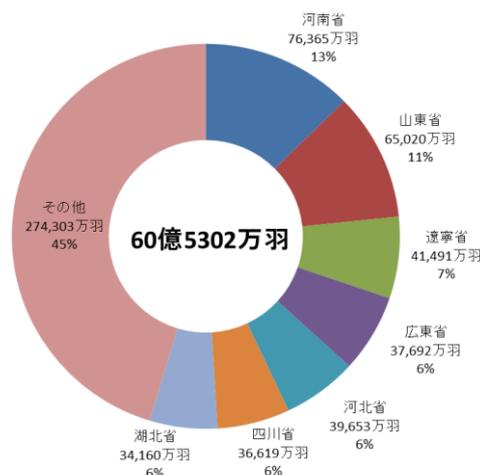
2017年の家きん肉の生産量は、前年比6.8%減の1160万トンであった（表15）。米国農務省によると、中国の鶏肉生産量は米国、ブラジルに次いで世界第3位で、世界の生産量の18.3%を占める。

注：「家きん」はブロイラー（肉用鶏）や採卵鶏、アヒルなど。

図13 家きん飼養羽数上位7省

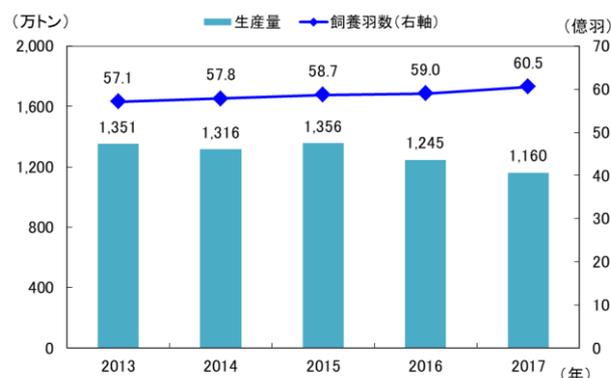


図14 省・自治区別家きん飼養羽数（2017年）



資料：中国農業農村部 「中国農業年鑑」

図15 家きん飼養羽数と家きん肉生産量の推移



資料：中国農業部 「中国農業年鑑」

表14 家きん（肉用）の出荷規模別の農場戸数

(単位：万戸)

区分／規模	全体	1～1,999羽	2,000～9,999羽	1万～29,999羽	3万～49,999羽	5万～99,999羽	10万～499,999羽	50万～999,999羽	100万羽以上
戸数	1,900.2	1,871.0	17.5	6.2	2.7	1.9	0.8	0.1	0.1
割合	100.0%	98.5%	0.9%	0.3%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%

資料：中国農業農村部 「中国畜牧兽医年鑑」

鶏肉の輸出は鶏肉調製品が中心である。主な輸出相手国は日本（8割）であり、2014年に発覚した消費期限切れ鶏肉の使用問題により2015～2016年の輸出量は減少していたが、2017年は回復した。（表15）。

2016年12月以降、国内でヒトへの鳥インフルエンザ（H7N9型）の感染が多数報告されたことを受け、政府は生体家きん市場を相次いで閉鎖した。生体で販売できなくなった鶏は丸どりとして小売店に供給されたため、供給過剰により鶏肉の小売価格が一時的に低下した（図16）。

表15 鶏肉需給の推移 (単位:万トン)

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
生産量	1,351	1,316	1,356	1,245	1,160
輸入量	24.4	26	26.8	43	31.1
輸出量	42	43	40.1	38.6	43.6
消費量	1,333	1,299	1,343	1,249	1,148

資料：USDA/FAS「PSD Online」

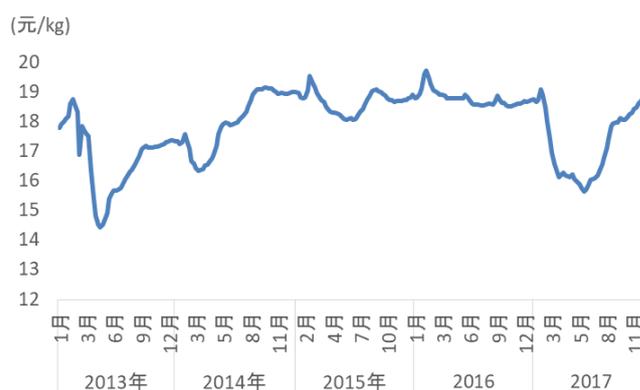
注1：輸入量および輸出量には、鶏肉調製品を含む。

注2：重量は調理用換算（Ready to Cook Equivalent）、もみじ（鶏足）を除く。



写真7 済南市内の市場での丸どり販売風景

図16 鶏肉（丸どり）の卸売価格の推移



資料：中国農業部「中国農業発展報告」



写真8 済南市内の市場での生鳥販売風景

(5) 飼料穀物

中国はトウモロコシを重要な作物と位置付け、需給の安定を図るため、穀物備蓄政策を実施してきた。しかし、近年、最低買付価格を保証する備蓄政策の実施や、トウモロコシやその代替作物であるコウリヤンの内外価格差などにより、在庫が積み上がっていたため、政府は2016年から他作物への作付け転換を促すとともに、同年4月にとうもろこしの政府による最低保証価格を廃止し、市場買付けに移行した。

トウモロコシの国内生産量は、2016年以降、減少傾向で推移している。一方で、消費量は飼料向けと工業向けが増加し続けている（表16）。なお、生産量を地域別に見ると、東北3省（黒竜江、吉林、遼寧）で全体の3分の1、さらに上位10省で約8割を占める（図17）。

また、中国では、大豆を大量に輸入し、搾油後の大豆油かすが家畜飼料の原料として使われている。2017年度の大豆輸入量は9410万トンであった（表17）

図17 トウモロコシおよび大豆の生産分布

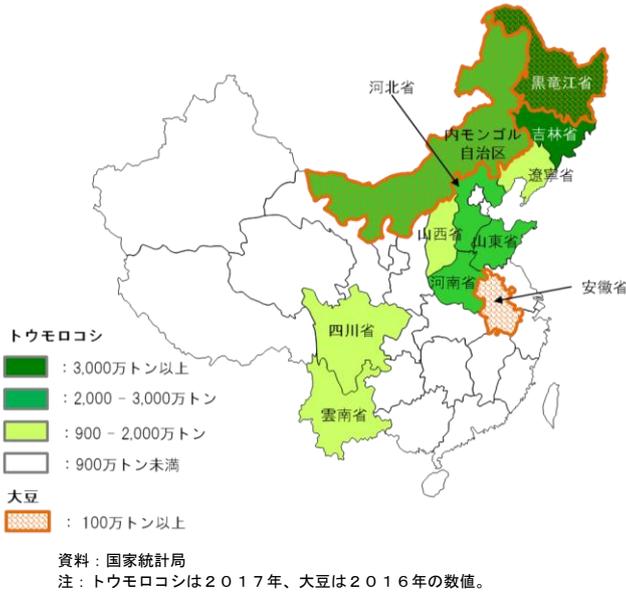


表16 トウモロコシ需給の推移

年度	2013	2014	2015	2016	2017
作付面積 (万ha)	3,557	3,577	4,497	4,418	4,234
総供給量	28,052	30,959	44,102	47,809	48,554
国内生産量	20,440	20,119	26,499	26,361	25,907
期首在庫	7,285	10,285	17,286	21,202	22,302
輸入量	328	555	317	246	346
総需要量	17,767	15,461	22,900	25,508	26,302
国内消費量	17,765	15,460	22,900	25,500	26,300
飼料向け	12,250	9,950	16,500	18,500	18,700
食用・工業向けなど	4,150	4,120	6,400	7,000	7,600
輸出量	2	1	0	8	2
期末在庫	10,285	15,498	21,202	22,302	22,253

資料：USDA/FAS PSD online
注1：2018/19年度、2019/20年度は10月時点の見込み。
注2：生産年度は10月～翌9月。
注3：総需要量＝国内消費量＋輸出量。

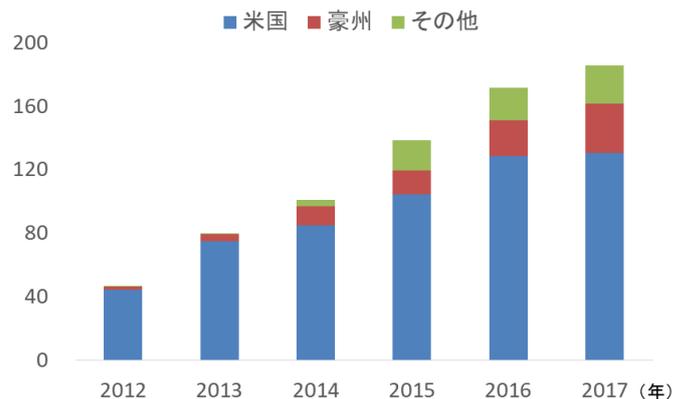
表17 大豆需給の推移

	2013	2014	2015	2016	2017
作付面積 (万ha)	705	710	682	760	77
総供給量	9,518	10,500	11,315	12,428	12,996
国内生産量	1,241	1,269	1,236	1,364	1,520
期首在庫	1,241	1,397	1,756	1,714	2,066
輸入量	7,036	7,834	8,323	9,350	9,410
総需要量	8,122	8,794	9,601	10,361	10,643
国内消費量	8,100	8,780	9,590	10,350	10,630
飼料向け	210	270	320	360	390
工業向け	6,890	7,450	8,150	8,800	9,000
食用向け	1,000	1,060	1,120	1,190	1,240
輸出量	22	14	11	11	13
期末在庫	1,397	1,706	1,714	2,066	2,352

資料：USDA/FAS PSD online
注1：2018/19年度、2019/20年度は10月時点の見込み。
注2：生産年度は10月～翌9月。
注3：総需要量＝国内消費量＋輸出量。
注4：搾油向けは「工業向け」に含まれる。

また、乳牛の飼料として、アルファルファの輸入量が急速に増えている（図18）。なお、アルファルファはほとんど乾草であり、ミールやペレット状のものは少ない（写真10）。

図18 アルファルファの輸入量の推移



資料：「Global Trade Atlas」
注：HSコードは1214。



写真9 吉林省で生産されたトウモロコシ



写真10 天津市に輸入されたアルファルファ



写真11 生産された配合飼料の運搬風景